



*The Japanese
Society of
Toxicology*

**Vol. 48 No. 3
June 2023**

毒性学ニュース

Toxicology News

一般社団法人日本毒性学会

The Japanese Society of Toxicology

毒性学ニュース

Contents

日本毒性学会からのお知らせ

日本毒性学会設立に関する記事の再掲載に当たって	27
日本毒科学会誕生の経緯について	28
日本毒科学会設立当時を顧みて	34
社員総会開催のご案内と出欠票（委任状）提出のお願い	36
2023年度年会費の納入のお願い	37
日本毒性学会教育委員会からのお知らせ（第3報）	38
第26回日本毒性学会認定トキシコロジスト認定試験	41
第50回日本毒性学会学術年会のご案内（第6報）	42
第49回日本毒性学会学術年会要旨集の販売について	47

その他のお知らせ

第30回日本免疫毒性学会学術年会	48
フォーラム 2023 衛生薬学：環境トキシコロジー	48

一般社団法人日本毒性学会の定款および規程類について

日本毒性学会設立に関する記事の再掲載に当たって

日本毒性学会理事長
務台 衛

日本毒性学会は、学会ロゴに小さい文字で印されているように1976年（昭和51年）に立ち上がりました。正確に述べると、当学会が日本毒科学会として設立されたのは1981年であり、その前身の2つの団体、「毒性研究会」と「日本毒作用研究会」が合流したのが1976年です。この年にはJournal of Toxicological Sciences (JTS) が創刊され、また4年後の1980年には日本毒作用研究会としてIUTOXに参画しています。

これらの経緯について、田邊恒義先生（初代理事長、JTS初代編集長、第9回学術年会長）と今道友則先生（第10回学術年会長）が1993年（平成5年）の「学会情報」（毒性学ニュースの前身とします）に寄稿された文章を後述する学術年会抄録集のPDF化の過程で偶然再発見しました。当学会の設立に関わる貴重な情報であることから、毒性学ニュースにて再掲載することとしました。

様々な社会情勢の変化を発端とした医薬品をはじめとした化学物質の安全性評価の重要性の認識の高まりを背景に学際的な「毒性学」が日本でどのように芽吹いたのか、「毒性学」という学問の呼称や当時の国際的な動向を含めて興味深く経緯が語られています。また、当学会黎明期における諸先輩の先生方の献身的な活動に感謝と感銘を覚えるところです。

本年6月に開催される第50回学術年会では、北嶋聡年会長の発案でこれまで電子化されていなかった第1回日本毒作用研究会（第1回学術年会）から第31回日本トキシコロジー学会学術年会までの抄録集のPDF化を行い、第50回学術年会ホームページで公開中です（[JSOT レガシー学術年会資料 | 第50回日本毒性学会学術年会 \(jsot2023.jp\)](#)）。田邊先生と今道先生の回想文と併せてご覧いただければ幸いです。

また、第50回学術年会では50回記念企画として当学会の歴史を振り返るパネルも展示いたします。是非、第50回日本毒性学会学術年会にご参集いただきますようお願いいたします。

なお、田邊先生と今道先生の回想文は固有名詞や用字用語等について原本に忠実に沿っていることをご了承ください。

日本毒科学会誕生の経緯について

北海道大学名誉教授
東日本学園大学名誉教授
田辺 恒義

客観的情勢

第二次大戦後、欧米諸国では爆発的に多数の新化学薬品が開発された。しかし、1950年代末にサリドマイド事件が欧米で起こり、新医薬品の安全性評価が重大な問題となった。1959年には米国FDAは新医薬品、食品添加物及び化粧品等の安全性評価、特に生殖試験を提唱し、1963年及び1966年にはこれを改訂し、催奇形性試験のガイドラインを公表した。

一方、1961年には米国とカナダの学者が協力してトキシコロジー学会（Society of Toxicology）を作った。欧州諸国も薬物毒性研究会（European Society for the Study of Drug Toxicity）を組織し、1964年には薬物中毒原論を公表し、さらに1966年にはWHOが薬物安全性の前臨床試験の原則を定めた。

日本も早くからこの問題を重視し、1961年には日本先天異常学会が発足した。1963年には厚生省は新医薬品の申請には催奇形性試験結果を提出することを義務付けた。これと前後して、本邦製薬企業各社は協力して医薬品安全性委員会を作り、欧米諸国と国内企業間からの情報収集を図り、設備を増設し、動物実験を志したが、種及び系統の揃った動物を得難く、専門家の育成には多くの年月を要した。

日本獣医畜産大学の今道友則教授は、1964年に動物繁殖研究所を創立し、自ら所長となった。また、1964年には国立衛生試験所に毒性部（部長：池田良雄博士）が新設された。1966年には、柳田知司博士は恩師のミシガン大学シーバース教授の支援を受けて、実験動物中央研究所の中に附属前臨床研究所を作り、彼の開発した猿を用いる薬物依存性試験法のみならず一般薬理及び毒性試験の研究受注を開始し

た。他方、国立衛試の毒性部は順次拡張し、1978年には安全性生物試験研究センター（センター長は池田博士から大森義仁博士へ受け継がれた）に拡充され、安全性試験の指導機関となった。かくして、動物供給業者も増し、生物試験技術も官民協力によって急速に改善されるに至った。この間、大学の薬理学教室や病理学者も散発的にこの問題に参画したが、学問的立場から本格的研究に取り組む学者は少なかった。私も1965年には北海道衛生部の依頼を受けて安全性試験を経験し、これが後日大いに役立ち、この問題は大学教育にも取り入れなければならぬという気になった。

学術会議における活動

第8期学術会議（1969.1.20～1972.1.19）では、公害問題特別委員会が設置され、公害に関する総合的、全国的な研究組織の創設とその成果を産業、国民生活へ反映、浸透させる努力を広く科学者に訴えた。また、科学者が既存の領域を越えて学際的に協力して調査研究が出来るよう、政府に要望した。この考え方には薬害も含まれていたが、未だ明確に記載されなかった。

第9期学術会議（1972.1.20～1975.1.19）には私は会員に選ばれ、医薬研連（委員長：宮木高明会員）の委員の一人になった。ここでは「医薬品の臨床試験評価に関する体制確保」が検討され、原案が出来た。この案は総会で承認され、総理府に答申された（1972年11月13日）。その内容は、新医薬品の臨床試験評価とそのチェック・システム、臨床薬理学者と試験施設の確保及び被験者の擁護と救済制度についてであった。

1976年に入って私は、他の会員（塚田、館及び今道博士等）に呼びかけ、生理研連の中にトキシコロジー小委員会を作ることを提案した。当時は薬理学は生理研連（委員長：勝木保次博士）に属していた。私は先ず勝木先生及び塚田会員の賛成を得る必要があった。次いで第七部の研連の再編を申し出、生理科学研究連絡委員会の大枠の中に薬理学研究連絡会（委員長：田辺会員）が出来、その中にトキシコロジー小委員会が活動することが許された。早速、小委員会メンバーを分野の異なる大学教授5～6名の方にお願ひし、検討を始めた。最初の問題はトキシコロジーという名称が日本語になじまないことであった。毒性学、毒作用学、中毒学、毒物学、毒理学、毒性薬理の外に安全性、環境、公害等の意見が出て、意見の一致が見られなかった。

第10期学術会議（1975.1.20～1978.1.19）：この期には先ず薬理学研究連絡会（委員長：田辺恒義、幹事：江橋節郎と藤森周一）が決まり、これがIUPHAR（International Union of Pharmacology）に対応することになった。次いで、トキシコロジー小委員会には臨床家の参加が要望され、日本名として慣用されてきた中毒の語を用いることに落ち着き、中毒研究連絡会と改名した。委員長には村野匡、幹事には今道友則と織田敏次の諸先生にきまり、委員には石川栄世（慈恵医大、病理）、粕谷豊（東大、薬）、勝木保次（東医歯大学長）、酒井文徳（東大、医、薬理）、白須泰彦（残留研部長）、田辺恒義（東日大、薬、薬理）、館正知（岐大、医、公衛）、塚田裕三（慶大、医、生理）、土屋健三郎（慶大、医、公衛）、吐山豊秋（東農工大）、藤原公策（東大医科研）及び山野俊雄（阪大、医、生化）の12博士と決まった。他に1977年12月15日には薬理研連はIUPHARに対応するため新たに臨床薬理小委員会（委員長：田辺恒義、委員10名）を加えることを申し出て承認された。

第11期学術会議（1978.1.20～1981.1.19）：1978年5月には日本学術会議第11期活動計画調整委員会（委員長：今道友則）が出来、研連整備実施要領が定められ、研連の整備にとりかかった。その理由は、研連の申込みが急増し、限られた学術会議の予算（国費）を以てしては全部を賄い切れなくなったからである。連絡によって、私は中毒研連を毒科学研究連絡会（委員長：酒井教授）と、再び改名することを要望し、その理由を提出した。調整委員会の案によると、研究連絡委員会を次の4段階に分けてあった。

即ち、総合研究連絡会－研究連絡委員会－研究連絡会－分科会の順であった。それらの関係の欄を見ると、生理科学総合研連の下に（a）生理科学研究連絡委員会と（b）脳研究連絡委員会の二つがあり、（a）の下には薬理学研究連絡会（委員総数10名、内役員として委員長：田辺恒義、幹事：江橋節郎、北川晴雄）と毒科学研究連絡会（委員総数10名、内役員として委員長：酒井文徳、幹事：山野俊雄、粕谷豊）が位置付けられていた。当時私は学術会議会員ではなかったが、調整委員会に呼び出され、意見を述べる機会が与えられた。その時私は次の事を強調した。（1）IUTOX加盟の日本薬理学会は、1981年には日本が第8回国際薬理学会開催国になることを決めていること、（2）第1回国際トキシコロジー学会（1977年）に於いてはIUTOXの創立が提議され、わが国でも近く国際学会を引き受けるようにと強い要望があったこと、（3）今やIUPHARとIUTOXには国際生理科学連合とはそれぞれ異なった領域の学者が多く集まって活動を始めており、内容的には生理科学の範囲外に属する人が多い事、（4）臨床薬理学もIUPHARの中の一科会として活動しているので、これに対応するため、私は日本薬理学研連の一科会としてこれを認めるよう要望していた。今回の案にはこれが欠けているのは遺憾である旨の抗議を行った。

研連シンポジウム：学会活動の一環として、対応研連主催のシンポジウムを公開することになっていた。但し、経費は学会持ち。毒科学研連の委員長酒井文徳教授は、1979年11月20日に日本学術会議第一部会議室に於いて「生物由来の神経毒」に関するシンポジウムを行った。次いで、1980年10月30日には、館正知学長（岐大）及び藤村一教授が世話人となり、生理科学研連委員会、毒科学研究連絡会及び毒作用研究会（1981年1月より日本毒科学会と改名）共催で「感覚器毒性」と題するシンポジウムを行った。爾来、毎年一回毒科学研連の名に於いてシンポジウムを開いて今日に至っている。なお、臨床薬理小委員会は薬理研連内の小委員会として学術会議の予算外の分科会として認められた。また、毒科学会の機関誌、学会、シンポジウム等に関する報告を学術会議連絡室に送り、活動状態を示すことにした。何れ、国際学会を開催するときの国の応援を得るのに役立つからである。

毒作用研究会	会長（敬称略）	日 時	会 場	一般演題数
第3回	粕谷 豊	1976.11.24	社会文化会館	63
第4回	石川 栄世	1977. 6.24	慈恵医大講堂	81
第5回	白須 泰彦	1978. 5.19	東京農協ビル	69
第6回	山野 俊雄	1979. 6. 1	大阪日本生命研修所	55
第7回	柳谷 岩雄	1980. 6. 6	大阪科学技術センター	55
第8回以降は毒科学会と改名。以下、略。				

毒性研究会

学術会議の研連に顔を出すには学会組織が活発に活動し、しかも学際的学会として世間に認められなければならない。学術会議でいう学際的とは、二つ以上の部にまたがる学問領域の学者が一つの目的を以て集まる連合を指す。なお、医・歯・薬は第7部に、獣医学・農学は第6部に属している。1973年には獣医学（第6部）関係の先生方が中心になって製薬会社の毒性指導者が集まり、同年10月25日の総会において毒性研究会の旗揚げが行われた。その時の世話人は代表：今道友則（動物繁殖研究所長、学術会議会員）、世話人：白須泰彦（残留農薬研究所）、吐山豊秋（東農工大、家畜薬理）、藤原公策（東大、農、家畜病理）、の諸先生であった。事務所は残留農薬研究所内に置き、会員数435名、賛助会員36社との記録（毒性研究会報 No.1, p.23, 昭和49, 1月）が残っている。

1974年2月19日には毒性研究会第2回シンポジウムが開かれた。なお、同年11月11日京都教育文化センター・ホールにおいて第2回総会が開かれ、今道理事長は学術会議内で論議されている中毒関係学会との連絡を密にし、学際的集まりに対して混乱なきよう対応することを述べられた。

毒作用研究会の発足

学術会議第9期に誕生したトキシコロジー小委員会は基礎医学、臨床医学、薬学、公衆衛生学、獣医学等の学際的なメンバーが中心となっていたので、これらのメンバーが心を合わせると学際的な学会が出来る筈であると考えた。そこで、先ず、和歌山医大学長村野匡博士の発言で、和歌山にいろいろな分野の学者が集まってもらい、顔合わせと同時に小研究会を行った後に意見の交換を行った。確か、1974年の

冬頃であったと思う。

その後、数回に亘って東京で会合を開き、各分野の先生方の考え方を拝聴した。結局、毒作用研究会ということで一応学術集会をやるということになり、酒井文徳教授（東大、医、薬理）に第1回会長をお願いすることになった。1975年2月10日、国立教育会館で酒井教授主催の下に開かれた研究会（学会）は予想外に盛大で、浦口健二先生と G. L. Plaa 教授（モントリオール大、薬理）の二大家の特別講演の外に26題の一般演題が公開された（J. Toxicol. Sci., Vol. 1, No.1, 1976 参照）。この機会に酒井教授は機関誌を作ることを提案した。機関誌を持たないと研究会は長続きしないというのが酒井教授の意見であった。結局、私が編集を担当することになり、案を作成することになった。

第2回毒作用研究会は岐阜医大の館正知学長（公衛）と決まり、1976.2.10に岐阜市産業会館で開かれ、喜多村正次教授（神大、医）の特別講演他55題の一般講演が公開された（J. Toxicol. Sci., Vol. 1, No. 2, 1976 参照）。

第3回以降の毒作用研究会は上の表の如く順調に続き、会員の数も増し、大学、官庁及び民間企業からの参加も増し、予想通りの学際的研究会となった。

機関誌の名称と統合の由来

毒作用研究会第1回会長酒井文徳教授提案の学会機関誌の編集を引き受けた私は誌名を何としたりよいか苦悩せざるを得なかった。学術会議の研連小委員会の命名で散々に苦しんだ経験があるが、それ以上に難しいのは学会誌名であった。Toxicology の直訳邦名が存在しない日本で、しかも毒という言葉が無益有害な危険な響きを感じずる日本では、何とかこの文字を目立たないように、どう表現したらよいかと迷ったのである。私は大学在職中、長年に亘り図書館長

をやらされた関係上、様々な学会誌名を見る機会を持った。その時、私の目についたのは International Congress on Physiological Sciences であった。これをヒントにして Journal of Toxicological Sciences (第一案) という表現を思いついた。そして、これを英文誌にしたらよいと考えた。その理由は、(1) 将来これを国際的な専門誌に育て上げよう。(2) 内容は専門家だけに理解出来ればよい。毒という和名が出なければジャーナリズムの目にも留まらず、特定の商品に多大な迷惑をかけることもないであろう。(3) 教育的内容の部分や連絡事項は邦文のままで組み込んでよいであろう、と考えたからである。(4) Japanese Journal of Toxicology という誌名は一般的であるが、Toxicology は Pharmacology に近過ぎ学際性から離れるという批判があったことを思い出し、これは第二案とすることにした。

1975年の夏頃であったと思うが、酒井会長は東大キャンパスの近くの公務員共済会館で準備委員会を開いた。この時、私は、突然、第一案の“Journal of Toxicological Sciences”を黒板に書いて皆さんの顔色を見た。異なった専門分野の第一人者の集まりで成り立った委員会の先生方からは全く異議が出なかった。予想外に包括的な大きな夢のある誌名になると受け取られたものと思う。私は肩の荷を下ろした気持ちになり、第二案の誌名は持ち出さなかった。Toxicological Sciences という表現から、どんなイメージが湧くかを問うた。その結果は、J. Toxicol. Sci., Vol. 1, No. 1 (1976, 1月号) にまとめた。今これを読み直して見ると、皆さんの識見の高さには頭が下がる思いをする。さらに私の敬服したことは、毒性研究会の先生方が快くこの誌名に賛意を示されたことである。この方面の学問が幾つかの分派に分かれることなく発達することは、国際的にも大きな力として認められ、将来、IUTOX が出来た時には重要なメンバーとなり得るものと考えた。

第1回国際トキシコロジー学会 (1st International Congress in Toxicology)

米国の Society of Toxicology (SOT, 1961年創立) と欧州の European Society of Toxicology (EST) は連合会議を積み重ね、Canadian Association of Research in Toxicology (CART) がこれに加わ

り、第15回 SOT 学会 (1976.3.15 ~ 16) の際に国際トキシコロジー学会 (International Congress in Toxicology) の打ち合わせが行われた。1976年11月に発表された第1回国際トキシコロジー学会の案内書には、運営委員会 Steering Committee の中に白須泰彦博士の名があった。白須博士は以前から SOT の会員であったらしく、知己も多かった。翌年の第16回 SOT 学会 (1977. 3.27 ~ 30) に引き続き、3日間、第一回国際トキシコロジー学会がシンポジウムの形で、Toronto の Royal York Hotel に於いて開かれた。私はこの学会に参加した。

白須博士は私を Murphy 教授 (運営会副委員長) に紹介した。同教授は Dr. Friess と話し合ってくれというのであった。国際学会の提案者の中心をなしていたのは Dr. Seymour L. Friess (米海軍軍医幹部と記憶する) であることはすぐ分かった。そして彼は私が日本毒作用研究会の代表であることを知っていた。彼と二人で話し合うこと2時間に及んだ。会談の中心は、(1) 第2回国際学会を日本でやらないか、(2) IUPHAR (国際薬理学会連合) と同様な IUTOX (International Union of Toxicology) の設立に積極的な加担をしないか、の二点であった。後段に関しては私は賛意を示し、学術会議 (Science Council in Japan) を通して日本政府に働きかける事は可能だと私は答えた。前段の要望に関しては、国内体制が未だ強固になっていないので引き受けられない。但し、体制が整いつつお引き受け出来ると思うことを説明した。結局、第2回国際トキシコロジー学会は1980年7月に Brussels, Belgium で開かれることに決まった。

IUTOX (International Union on Toxicology) 創立の国際的準備

第7回国際薬理学大会 (International Congress on Pharmacology) が1978年パリにおいて開かれた際に、トキシコロジー分科会が設定され、その分科会長としてスイス、チューリッヒ大学トキシコロジー教室の G. Zbinden 教授が推挙された。彼は IUPHAR 所属会員の Toxicology に関する活動の情報を集約し、IUPHAR とは別に IUTOX の創立を支援することを提案した。

1980年7月7~11日に Brussels で開かれた第2回国際トキシコロジー学会の運営委員会は、IUTOX

の創立準備を進めてきた。そして IUTOX の規約原案まで作製していた。1979 年末には IUTOX 運営委員会秘書 Burford 博士から私宛に日本の正式代表者と理事候補を指名するようにとの書簡が来た。早速会議によって日本代表には酒井文徳教授、理事候補には池田正之教授と決め、その旨を通知した。この 2 人には個別に Burford から連絡があり、事前の打ち合わせがあった。白須博士は当初から運営委員として IUTOX 準備情報を受けていたので、会議には酒井先生に同行するようお願いした。

しかしながら、日本の毒作用研究会は完全に学会として組織が出来上がるまではオブザーバーとして参加することにしていた。しかし、現地に着いてみると、日本代表の 3 名（酒井文徳教授、池田正之教授及び白須泰彦博士）は他国代表と均等の取扱いを受けることになった。Dr. Friess（米国）が私を捜しているとの伝言により、私は急いで会場へ行った。彼とは旧知の間柄なので私を親しく迎えてくれ、別室にて二人切りで話し合った。この時の話題も第 3 回の国際大会を日本で引き受けないかという事であった。私は第 3 回大会は米国でやるのが順当で、日本はその次に考えてくれと申し入れた。彼は私の主張を受け入れた。その時に私は、やや独断的であったが、Japanese Society of Toxicological Sciences という言葉を使った。この学会名はその後正式に認められた。

IUTOX 運営委員会秘書 Burford 博士から、Japanese Society of Toxicological Sciences の公式代表として酒井文徳教授とする旨が伝えられた。IUTOX 実行委員会は会長として S. Friess（米国）を、副会長として D. Henschler（西独）と Holmstedt（スウェーデン）を、またその他の役員についても伝えたが、本人の都合によって多少の入れ替えがあることが述べられた。理事の中には日本の推薦した池田正之教授が入っていた。なお、この学会に参加した日本の学者は 28 名（List of participants による）であった。

Brussels の大会に引き続き Satellite Symposia が 3 題、Workshop 2 題が欧州数ヶ国で行われた。私は仏国 Montpellier で開かれる「薬物による腎障害」に出席した。ここでスイスの Hodel 博士と知り合い、2 日間席を並べて参加したのは有意義だった。彼は IUTOX の会計として重要な役割を演じ、後日、日本毒科学会の名に於いて送金し、正式に IUTOX のメンバーに加わったのである。

ICT III (Third International Congress on Toxicology) は IUTOX 主催の公式機能を持つ国際学会として認められ、1983 年 8 月 28 日～9 月 2 日の間カリフォルニアの San Diego で開かれた。その頃までには日本は IUTOX に加入を済ませていた。ICT III において公表された IUTOX の初代役員は次の如くであった。舞台裏に徹していた Dr. Friess は漸く表に出て会長となった。

会長 : S. L. Friess (米国)
副会長 (第一) : D. Henschler (西独)
副会長 (第二) : B. Holmstedt (スウェーデン)
庶務幹事 : R. G. Burford (米国)
会計 : L. Hodel (スイス)
理事 (5 名) : N. W. Aldridge (英国)
E. Fournier (仏国)
池田正之 (日本)
P. Gupta (インド)
G. Plaa (カナダ)

ICTIII のプログラムの第 1 ページに IUTOX 初代会長 Friess 博士の序文が載っていた。彼の言わんとしたのは概ね次の如くであろう。近代トキシコロジーは広範な学術的分野にまたがり、その研究成果は人類や他の動(植)物の健康(生存)のみならず、環境全体に関わるものである。従って、この学会に招かれる専門家はそれぞれ、一般科学、臨床医学、基礎医学、法律学(法医)、獣医学等総ての分野で活躍している科学者達であり、しかも研究、試験検査、行政、教育または医療等の様々な立場から Toxicology の発達に寄与している方々である。これらの広い多方面からの多くの研究結果が一堂に持ち寄られ、討論され、新しい科学に集約されるものと信ずる。国際トキシコロジー学会は、この意味に於いて、IUTOX の学術的目的の一つである。そして、彼の文末には「IUTOX は ICT IV を 1986 年に日本で開催する準備をしており、学会組織母体は Japan Society for Toxicological Sciences となる予定である」と宣言していた。

Modern Toxicology や Toxicological Sciences という表現を使った Dr. Friess は、我々と同じ考え方に立っていることの証明であり、我が意を得たりと満足したのであった。

毒作用研究会の学会化準備

1979年6月1日の毒作用研究会は阪大山野教授(生化学)主催の下に日本生命中之島研修所で開かれた。この時の評議会に於いて、将来に対する提案として学会化への準備体制を作ることが提案され、その準備委員会の編成を田辺委員長に一任とされた。この提議を念頭に於いてBrusselsの大会に出席した私は酒井先生と同ホテルでしかも同室に入ることにした。種々の会議や談合の結果を持ち寄って、それに対する日本の態度を明確にするためであった。食事も二人一緒に市内の食堂を漁ったのも忘れ難い思い出となった。

帰国後、評議委員会の合議の結果に基づいて毒作用研究会の学会化準備委員会を作った。委員22名のお名前は機関誌J. Toxicol. Sci. のVol.4, No.4, 1979, 黄ページをご参照願いたい。この会議によって初めて学会名として「日本毒科学会: The Japanese Society of Toxicological Sciences」が案として認められ、次回評議委員会に提案されることが決まった。そして学会会則案作製の小委員会を在京委員から選んだ。この小委員会は精力的に会合を開き、1980年11月19日には最終会議をヘキスト・ジャパン総合研究所(同社重役村野匡先生の御尽力による)に於いて開き、最終案を決めた。私も参加していたが、今までにない立派な会場で、総てが極めて円満に決定したことを村野先生に今でも感謝している。

日本毒科学会の発足

1980年6月6日第7回毒作用研究会が大阪科学技術センターに於いて行われた。大阪府立大学の柳谷岩

雄教授が学会長であった。昼食時の評議委員会で毒作用研究会は毒科学会に改名する件と日本毒科学会会則の件が満場一致で決定した。この会則は1981年1月1日から有効と決まった。そして、毒作用研究会の会員並びに評議員はこの会則施行と同時に、それぞれ本学会の一般会員および評議員に移行し、毒作用研究会の役員は、第一回理事会発足までの期間は本学会の会務を執行することになった。(J. Toxicol. Sci., Vol. 5, No. 3, 黄ページ別紙5, 6ページ, 1980参照)。学会化準備委員会(会長田辺)は日本毒科学会会則に従って、期日までに役員並びに事務機構を整備し公表する責を負うた。かくしてJ. Toxicol. Sci., Vol. 6, No. 1 (1月号) 1981の黄ページ「日本毒科学会が発足しました」の記事の通りとなり、私は理事長の重任を負うことになった。勿論、第8回日本毒科学会(会長塚田裕三教授)に於ける総会において賛同を得た。実は第7回毒科学会記事(J. Toxicol. Sci., Vol. 5, No. 3, p. 251, 1980)は正しくは毒作用研究会記事とすべきであったが、この年会の理事会で毒科学会への変更が賛同されたので、柳谷会長と相談の上、記念のために敢えて新名を使用した。「毒作用で始め、毒科学で終わった」年会を祝って夜遅くまで二人で一杯やったことを付け加えたい。

謝辞: この回想文を書くに当たり、須藤純一博士に資料収集並びにタイピングの労をお願いした。また、粗原稿をかつて毒科学会創立に御尽力を頂いた先生方に送り、誤り及び思い違いを訂正していただいた。各先生方の御援助に心から感謝致します。

日本毒科学会設立当時を顧みて

(財) 動物繁殖研究所
理事長 今道 友則

日本毒科学会は昭和51年(1976)4月に設立されたが、その前身毒作用研究会の第1回研究発表会が昭和50年(1975)2月16日に開催されてから18年が経過した。

先般、村野匡先生(当時、和歌山県立医科大学学長)からお電話があり、毒科学会設立に至る経緯や、その時すでに存立していた毒性研究会(理事長:今道友則)との関係等について、歴史的なことをまとめて記録に残したいとのことであった。当時の日本学術会議内での動き等を含めて概述する。

当時の背景

昭和36年(1961)のサリドマイド禍を契機として新薬の安全性を確かめるため、催奇形性検索の重要性が叫ばれ、日本先天異常学会が発足した(1961年)。そして、数年後には新薬の毒性試験では一般毒性試験に加えて催奇形性試験(2種以上の動物)が要求されるようになった。一方、米国において1975年頃から製薬企業連合(PMA)で動物試験の自主規制(GLPガイドライン)が制定された(1976年3月)。そしてさらに、FDAによるGLP法規制へと発展し、1976年11月にGLP法規制案が発表され、1978年12月にGLP法規制の公布、翌1979年6月20日に発効となった。また、わが国においても、日本製薬工業協会が昭和51年(1976)に自主規制GLPの検討を開始し、厚生省でも昭和53年(1978)にGLP検討委員会(委員長:大森義仁、国立衛試安全性生物試験研究センター長)を設けて、3年計画でGLP案作成が開始された。

毒性研究会や毒作用研究会設立当時はこのような社会的背景にあり、医薬・農薬・動物薬・工業薬等の安全性試験の規制が強化され、製薬企業のみならず安全性試験の受託機関等で多数の研究者・技術者

が毒性試験に従事していた。毒性試験担当者は医・薬・菌・獣医・畜産・農学・生物学等の各種分野から構成されており、Toxicological Scienceの研究自体が学際的であるにもかかわらず、当時においてはその研究者は既存の各学会に分散して所属し、研究成果も分散して発表されていた。

毒性研究会は、安全性試験の現場で苦勞している若い研究者・技術者に討論と研究成果発表の場を作って研究の発展を図ろうとして獣医学関係者を中心に発足したものであり、一方、医学・薬学系の大学関係者を中心にToxicologyの研究体制を整えようという動機から出発したのが毒作用研究会であった。そして二者が合体して、日本毒科学会が生まれた次第である。

毒性研究会

藤原公策(当時、東大農学部教授)、吐山豊秋(当時、東京農工大教授)、白須泰彦(当時、残留農薬研究所毒性部長)と当時日本獣医畜産大学教授であった今道を世話人として、実験動物学会(当時、同研究会)会員で主に毒性試験研究に関与している方々に呼び掛け、昭和47年(1972)秋頃から約1年の間に数回の準備会合を経て昭和48年(1973)に静岡薬科大学講堂で総会を開いて会則を定め、第1回講演会を開催した。そして、11月から発足することとし、会則が施行され理事長が選出されるまで今道が世話人代表となり、世話人3名とで会則に準じて会を運営することにし、事務所を小平市の残留農薬研究所に置いた。翌昭和49年11月11日の京都教育文化センターホールで行った第2回総会で今道が理事長に選出された。

毒性研究会が開催した講演会・研究発表会を以下に示す。

第1回講演会	昭和48年(1973)10月25日 静岡薬科大学 毒性試験の現状と問題点 5題
第1回研究発表会	昭和49年(1974)2月6日 公衆衛生院 一般講演 31題
第2回研究発表会	昭和49年(1974)11月11日 京都教育文化センター 一般講演 30題
第2回講演会	昭和50年(1975)2月19日 東大医科研 突然変異性試験について 4題
第3回研究発表会	昭和50年(1975)11月12日 公衆衛生院 一般講演 26題

これらの講演要旨を毒性研究会報としてNo. 5まで発刊した。

Journal of Toxicological Sciences の創刊号 (Vol. 1, No. 1) の76～111頁に一般講演の要旨が転載されているので参照されたい。

毒性研究会は昭和50年11月の総会で昭和51年3月を以て発展的に解散し、毒作用研究会と合流し、日本毒科学会を創設することと決定し、会員(一般568, 賛助48社)は全員毒作用研究会に移籍することになった。また、毒性研究会報を原著誌とする計画も中止した。

日本学術会議内における Toxicology 研究組織設立への動き

第9期学術会議で第7部会員田辺恒義(当時、北大医学部教授)が中心に同部塚田裕三(当時、慶応大学医学部教授)と第6部会員今道友則(当時、日本獣医畜産大学教授)で相談してToxicology研究組織を作るべく、先づ生理科学研究連絡委員会(委員長: 勝木 保次)の中に毒分科会を作り、毒科学研究集会の結成発展を図り、外国におけるToxicology研究学術団体との連絡対応を行うことになった。

毒作用研究会の設立準備と 毒性研究会との対応

日本学術会議の動きと連動して田辺教授のリードの下に毒科学の学術団体結成を目指して、酒井文徳東大医学部教授、村野匡和歌山県立医科大学学長を中心に多くの方々が協力して昭和49年(1974)頃から毒作用研究会設立の準備が強力に進められ、昭和50年(1975)2月10日に第1回の総会研究発表会を開催し、昭和51年1月に機関誌The Journal of Toxicological Sciencesの発刊に至った。この間、前述のように昭和48年11月に発足した毒性研究会(理事長: 今道)はすでに活動をしていたが毒作用研究会の発足により、両研究会に所属する人も相当数いるうえに、元来両研究会いずれも分散して発表されているToxicologyの研究を共通の学問的立場で討議できるようにすることを目的にしていたので、1年余に亘る協議を経て毒性研究会を発展的に解散して、毒作用研究会に合流し、日本毒科学会設立に漕ぎつけた。

終わりに

日本毒科学会創立に関与した一員として、日本毒科学会の益々の発展を祈る次第であるが、毒性研究会を円満に解散・合流させたこと責任者であった立場で、一言付言して稿を終えたい。Toxicological Sciencesは化学物質によって生体に誘引される有害反応の発現Mechanismを究明する学問であり、その主目的は人類の健康保持である。同じ目的の下に裏側の立場から化学物質の安全性を確かめる安全性試験があるが、これはNegative Findingを目標としている。学問はPositive Findingの追求によって進歩するものであるが、社会的責任を負って安全性試験の実務に携わる若い研究者・技術者にNegative Findingの追求で研究意欲を失わせることなく、安全性判定を科学的根拠によって行うために如何なる研究をすべきか等、安全性試験現場の技術的・学問的向上への働きかけをさらに強化していただきたい。

社員総会開催のご案内と出欠票（委任状）提出のお願い

一般社団法人 日本毒性学会
社員（一般会員及び学生会員）各位

平素より日本毒性学会の活動、運営にご協力を賜り御礼申し上げます。

定款第4章に定められておりますように「社員総会」を、学術年会 期間中に開催いたします。本学会は一般社団法人であることから、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律に基づき、学会運営の重要事項は社員総会にて決議する必要があります（一般会員及び学生会員）各位におかれましては、ご出席賜りますようご案内申し上げます。

また、ご出席・ご欠席に係わらず「出欠票（委任状）」を、電磁的総会出欠（委任状）回答システムにより事前にご提出下さい。なお、本委任状回答システムへの入力のご案内は本年4月以降にメール等にてご連絡させていただく予定です。

社員総会の決議には、定款第24条に定められておりますように、総社員（一般会員及び学生会員）の議決権の「過半数」を有する社員の出席が必要です。定足数に満たない場合は社員総会として成立しなくなり、重要な議決事項が決定できず、本学会の運営に大きな支障を来すこととなります。社員総会にご欠席される場合には、必ず委任状をご提出されますよう、重ねてお願い申し上げます。

また、お近くの会員の方に、社員総会へのご参加または委任状のご提出をお勧めくださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

記

2023年度 一般社団法人日本毒性学会 社員総会
日 時：2023年6月20日（火） 13時15分～14時55分
場 所：第50回日本毒性学会学術年会 第1会場（パシフィコ横浜 会議センター 1F メインホール）
議 案：1. 2022年度事業報告および収支決算
2. 2023年度事業計画および収支予算
3. その他

以上

2023年6月1日
一般社団法人日本毒性学会
理事長 務台 衛

2023 年度年会費の納入のお願い

一般社団法人 日本毒性学会
社員（一般会員及び学生会員）各位

日本毒性学会定款第 11 条（会費）に基づき、2023 年度の会費の納入を受け付けております。会費は日本毒性学会の運営・活動の原資となりますので、年会費の納入をお願いいたします。

2023 年度 一般社団法人日本毒性学会 年会費

- 一般会員： 9,000 円
- 評議員： 12,000 円
- 学生会員： 3,000 円

評議員および一般・学生会員は会員専用マイページの会費納入状況のページより年会費のクレジットカード決済が可能となっております。2022 年度以前の未払いの年会費についても、同様の手続きでクレジットカード決済が可能です。事務経費節減のため、できるだけクレジットカード決済を用いた年会費の納入をお願いいたします。

ログイン URL：<https://area31.smp.ne.jp/area/p/mdkj9lftes8mjqt9/g7DahB/login.html>

郵便振込による会費納入をご希望の場合は、振込先口座情報をマイページの会費納入状況画面にてご案内いたしております。

なお、5 月末日までにクレジットカードか郵便振込による会費納入が確認できなかった会員宛には、6 月以降、郵便振込用紙を順次郵送します。

どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

一般社団法人日本毒性学会
理事長 務台 衛
総務委員長 小椋 康光

日本毒性学会教育委員会からのお知らせ（第3報）

教育委員会の各種事業は下記の要領で実施する予定です。詳細は決まり次第、学会ホームページおよび毒性学ニュースでお知らせします。

なお、学会主催講習会は、トキシコロジーに関する知識（基礎知識）を幅広く学習する基礎教育講習会とトキシコロジストとしての知識をアップデート・ブラッシュアップする生涯教育講習会として位置付けすることを基本方針として開催いたします。

「第26回日本毒性学会基礎教育講習会」

本講習会はトキシコロジストの系統的な基礎教育あるいは再教育を目的としております。また、トキシコロジー全般にわたる理解を深めたうえで、日本毒性学会認定トキシコロジスト認定試験受験にお役立て下さい。講習は動画配信形式で行います。受講者の皆様には4月下旬にダウンロード方法をご案内いたします。

1. 日時

2023年4月26日（水）～認定トキシコロジスト試験前まで

2. 形式

オンデマンド動画配信

3. 申込

終了しました。

4. 受講料

一般会員	25,000円
学生会員	5,000円
非会員	30,000円
学生非会員	8,000円
認定トキシコロジスト	20,000円

*領収書につきましては、参加証と一緒に送付いたします。宛名のご指定がある場合は、申込時に入力下さい。

*キャンセルに伴う返金に関しては、講習会資料事前案内内に限り、対応します。事務局から案内後は納入済み受講料の返金は原則としていたしませんのでご了承下さい。

*申込者ご本人のみの受講となります。

*ダウンロード映像、資料の二次利用は固くお断りいたします。

5. その他

*受講修了者には受講証明書を発行します。

「第24回日本毒性学会生涯教育講習会」

本講習会では、学習フレームを、①トピック、②トキシコロジスト・ブラッシュアップセミナーとして実施しております。本年も同様のフレームで開催を予定しておりますので、是非、積極的なご参加をお待ちしております。

トピックスは、SOTの学術年会時に開催される教育コースから、2つのテーマを選び、新しい科学及び技術に関する最新のトピックスを学習する場としていきます。トキシコロジスト・ブラッシュアップセミナーでは、各種毒性反応について基礎メカニズムから社会的に最新の毒性学の話題を含め深く学習する場としていきます。また、学習テーマに関連する共通知識として「非病理学者のための病理学講義」をセミナーに組み入れていきます。講習会資料はダウンロード形式としております。受講者の皆様には6月中旬にダウンロード方法をご案内いたします。

1. 日時

2023年6月19日（月）～7月3日（月）

2. 形式

オンデマンド動画配信

3. プログラム（仮）

1) トピックス SOT2023

竹村 晃典先生（千葉大学大学院）

「AM04: Beyond the Powerhouse: Investigating Mechanisms of Mitotoxicity; Following the course, attendees will have a clear understanding of the highly dynamic roles mitochondria play within the cell and at tissue and organismal level and the challenges and current solutions to analysis of mitochondrial endpoints, as well as a

new perspective on the role of mitochondria in toxicological mechanisms.」

黒田 雄介先生（日産化学株式会社）

「PM10：In Vitro to In Vivo Extrapolation Strategy and Guidance across Organ System Toxicities; Based on gaps in IVIVE guidance, this Continuing Education course will explore successful IVIVE studies across research sectors and highlight important strategy and principles critical for regulatory consideration.」

- 2) トキシコロジスト・ブラッシュアップセミナー：「環境・医薬品・化学品等，それぞれの領域における代替法の最前線」

山本 裕史先生（国立環境研究所）

「環境，医薬品，化学品等の代替（試験）法の国際動向～主に生態毒性について」

小野 敦先生（岡山大学学術研究院・医歯薬学域）

「化学品領域における新たな安全性評価手法の現状と展望」

奈良岡 準先生（アステラス製薬株式会社）

「医薬品開発における動物実験代替法の最前線」

古川 賢先生（日産化学株式会社）

「非病理担当者のための病理学講座 - げっ歯類と似てそうでちょっと違う魚の正常組織と病理組織学的変化 -」

4. 申 込

- 1) 終了しました。
- 2) 申込方法
当学会ホームページよりお申込下さい。登録後、期限内に次項の要領で受講料を納入下さい。受講料入金の確認後追って受講案内をお送りします。
- 3) 納入方法
ホームページよりお申込の上，下記銀行口座へお振込み下さい。
銀 行：みずほ銀行
支 店：麴町支店（021）
口座番号：普通 1348658
口座名義：一般社団法人日本毒性学会

* 振込手数料はご負担ください。

* ご所属名でお振込みの際は，事務局までメールで受講者氏名（会員の方は会員番号），所属，振込日，振込金額をご連絡下さい

5. 参加費

会 員：5,000 円

非会員：7,000 円

認定トキシコロジスト：3,000 円

「第26回日本毒性学会認定トキシコロジスト認定試験」

我が国の安全性試験の信頼性向上とトキシコロジーの進歩に寄与するため，質の高い専門家を認定するための試験です。受験資格の詳細については，毒性学ニュース及び学会ホームページの『一般社団法人日本毒性学会認定トキシコロジストの認定制度規程』をご覧ください。日本語・英語いずれかの受験になります。英語受験を希望する場合は，願書の英語受験希望欄にチェックを入れてください。

1. スケジュール

2023年11月5日（日）/ 予備日：11月12日（日）
自然災害等により11月5日に試験開催が困難であると判断した場合に，予備日に実施します。なお，試験開催を延期する場合には，2日前までに受験者へご連絡いたします。

2. 会 場（予定）

昭和大学 旗の台キャンパス

3. 受験料

30,000 円

「認定トキシコロジスト資格の更新」

2003年，2008年，2013年，2018年に認定トキシコロジストに認定された方となります。詳細は2023年4月頃にメールをお送りいたしますのでご確認ください。

毒性学ニュース，学会ホームページの『一般社団法人日本毒性学会認定トキシコロジストの認定資格更新に関する細則』をご覧ください。

「認定トキシコロジスト試験問題作成依頼について」

資格更新のための試験問題作成の依頼は6月上旬、締め切りは8月中旬を予定しています。なお、可能な限り、2018年3月発刊の「第3版トキシコロジー」からの出題をお願いいたします。その他、詳細につきましては、2023年6月にご案内いたします。

第26回日本毒性学会認定トキシコロジスト認定試験

日本毒性学会

教育委員会委員長

高橋 祐次

認定試験小委員会委員長

福島 民雄

下記の要領で認定試験を実施いたします。

受験希望者は毒性学ニュースまたは学会ホームページに掲載の「一般社団法人日本毒性学会認定トキシコロジストの認定制度規程」を熟読の上、出願して下さい。

出願時に提出された書類に基づく書類審査で上記規程に記載されている一定の基準に達しない場合は、認定試験を受けることができませんので出願に際してはこの点に十分に気をつけて下さい。

書類審査で受験資格が認められた場合、試験日の10日前までに受験票をご本人宛送付いたします。試験当日は必ず受験票を持参して下さい。

日本語・英語のいずれか言語での受験になります。英語受験を希望する場合は、願書の英語受験希望欄にチェックを入れてください。

1. 日 時

2023年11月5日(日) / 予備日: 11月12日(日)
台風等の自然災害により11月5日に試験開催が困難であると判断した場合に、予備日に実施します。なお、試験開催を延期する場合には、3日前(11月2日17時)までに受験者へご連絡いたします。

2. 会 場

昭和大学 旗の台キャンパス
(東京都品川区旗の台1-5-8)
* 東急池上線・大井町線
旗の台駅東口下車 徒歩5分

3. 出願期間

2023年7月24日(月)～9月11日(月)(消印有効)

4. 出願書類

- 1) 願書と受験者確認票, 申込受付自動返信メール
- 2) 写真2枚(縦3.5cm × 横3cm) ※6ヶ月以内のもの
(願書と受験者確認票の所定欄に貼付)
- 3) 認定試験受験資格のための評点表および証明資料
出願時には次のことにご注意下さい。
・ 会員歴: 出願時にJSOTの会員であること
・ 研究歴
詳細は「一般社団法人日本毒性学会認定トキシコロジストの認定制度規程」をご覧ください。出願書類は記録の残るもの(書留, 信書便等)でお送り下さい。

5. 受験料

30,000円(下記の郵便振替口座にお振込の上、払込票のコピーを出願書類に同封下さい)

銀行: みずほ銀行

支店: 麹町支店 (021)

口座番号: 普通 1348658

口座名義: 一般社団法人日本毒性学会

※領収書につきましては、振込時の振替払込請求書兼受領証にかえさせていただきます。
(通信欄に会員番号を明記下さい)

※出願が受理されますと、受験料は認定試験を受験しなくても返還できませんので、ご注意ください。

6. 出願書類送付先・問合せ先

一般社団法人日本毒性学会 事務局

認定試験小委員会

〒100-0003

東京都千代田区一ツ橋1-1-1 パレスサイドビル

(株) 毎日学術フォーラム内

TEL. 03-6267-4550 E-mail: jsotq@jsot.jp

第50回日本毒性学会学術年会のご案内（第6報）

（年会ホームページ：<https://jsot2023.jp>）

* 本年会は現地（対面）開催を予定しております

1. 会期

2023年6月19日（月）～6月21日（水）

2. 会場

パシフィコ横浜 会議センター

〒220-0012 神奈川県横浜市西区みなとみらい1-1-1

Phone：045-221-2155（総合案内）

URL：<https://www.pacifico.co.jp>

・みなとみらい線 みなとみらい駅より徒歩5分

・JR京浜東北線・横浜市営地下鉄 桜木町駅より
徒歩12分

3. テーマ

毒性学ってナンだ？ -そしてその先へ-

4. 年会長

北嶋 聡

（国立医薬品食品衛生研究所 安全性生物試験研究センター 毒性部）

5. 企画委員会（敬称略）

安西 尚彦（千葉大学）

石塚真由美（北海道大学）

上原 孝（岡山大学）

小川久美子（国立医薬品食品衛生研究所）

小椋 康光（千葉大学）

小野 竜一（国立医薬品食品衛生研究所）

諫田 泰成（国立医薬品食品衛生研究所）

菅野 純（国立医薬品食品衛生研究所）

熊谷 嘉人（九州大学）

桑形麻樹子（国立医薬品食品衛生研究所）

齋藤 文代（岡山理科大学）

渋谷 淳（東京農工大学）

杉山 圭一（国立医薬品食品衛生研究所）

鈴木 睦（協和キリン（株））

高橋 祐次（国立医薬品食品衛生研究所）

種村健太郎（東北大学）

角崎 英志（（株）新日本科学）

平林 容子（国立医薬品食品衛生研究所）

広瀬 明彦（（一財）化学物質評価研究機構）

黄 基旭（東北医科薬科大学）

堀井 郁夫（ファイザー（株））

増村 健一（国立医薬品食品衛生研究所）

宮脇 出（住友ファーマ（株））

務台 衛（（株）LSIM 安全科学研究所）

森 和彦（第一三共 RD ノバーレ（株））

山本 千夏（東邦大学）

吉田 武美（（公社）薬剤師認定制度認証機構）

吉成 浩一（静岡県立大学）

（五十音順）

6. 特別企画（敬称略，順不同）

1) 年会長招待講演

「Discovery and Development of COVID-19
Vaccines and Therapeutics」

Nasir Khan (Pfizer Inc.)

2) 特別講演

(1) 「睡眠の謎に挑む：『眠気』の正体を求めて」

柳沢正史（筑波大学 国際統合睡眠医科学研究機構）

(2) 「脳とAIの協創で拓かれる世界」

池谷裕二（東京大学大学院 薬学系研究科）

(3) 「魚が切り拓く先制医療研究」

石谷 太（大阪大学微生物病研究所 環境応答研究部門）

(4) 「染色体工学技術による毒性研究最前線」

香月康宏（鳥取大学染色体工学研究センター）

(5) 「アカデミア創薬ナラティブ」

萩原正敏（京都大学大学院医学研究科 生体構造医学講座）

(6) 「モロシヌスマウスの遙かな旅」

城石俊彦（理化学研究所バイオリソース研究センター）

(7) 「日本の有機フッ素化合物による環境汚染とその
毒性基本情報」

小泉昭夫（公益社団法人 京都保健会 社会健康医学福祉研究所）

(8) 「細胞外小胞の医療応用への期待と課題：毒性学
の観点からの考察」

落谷孝広（東京医科大学 医学総合研究所 分子細胞治療研究部門）

3) 教育講演

- (1) 「ヒト性染色体と環境」
深見真紀 (国立成育医療研究センター 分子内分泌研究部)
- (2) 「NRF2 活性化がん：古き実験動物モデルから診断と治療に向けて」
田口恵子 (東京大学大学院 農学生命科学研究科 食糧化学研究室)
- (3) 「依存性物質の神経系への毒性：子ども，発達期での影響を含めて」
池田和隆 (公益社団法人 東京都医学総合研究所 精神行動医学研究分野)

4) 年会長講演

- 「生命科学のパラダイムシフトと毒性学の進展」
北嶋 聡 (国立医薬品食品衛生研究所 安全性生物試験研究センター 毒性部)

5) フロンティアセミナー

- 「AlphaFold2 によるタンパク質立体構造予測を利用した毒性評価の試み」
武田一貴 (北里大学獣医学部獣医学科)

6) シンポジウム

- (1) 医薬品開発におけるバイオマーカー戦略の現状と展望
- (2) 毒性オミクスの毒性エピジェネティクスとしての展開と人工知能解析
- (3) (本部企画・生体金属) 生体金属部会シンポジウム ～金属毒性学の 50 年史とこれからの 50 年にかける期待～
- (4) ミクログリア毒性学
- (5) Next Generation Risk Assessment (NGRA) における New Approach Methodologies (NAMs) 開発の現状，課題，展望
- (6) 医薬品製剤の Extractables と Leachables の安全性評価の考え方
- (7) (本部企画・医薬品毒性機序) 医薬品毒性機序研究部会シンポジウム ～毒性機序研究を拓く先端技術の現状と展望～
- (8) 化学物質のアダクト形成を介した新規毒性機構の解明とその検出
- (9) 心臓の頑健性・破綻の制御と毒性評価への展開
- (10) 製薬業界における DX の実践～毒性研究 / 非臨床領域編

- (11) 発生発達期暴露による神経行動毒性の新たな課題
- (12) 法中毒学の教育・研究における新たな潮流と毒性学との連携
- (13) 医薬品における雄性生殖を介した発生毒性リスクの考え方
- (14) 細胞周期制御の破綻に起因する発がん研究の展開
- (15) CRO における毒性学の現状と課題
- (16) (本部企画・連携) 【SOT 合同シンポジウム】 Approaches for assessment of environmental exposures and immunotoxicity during susceptible life stages
- (17) ゲノム不安定性をみる～遺伝毒性研究のホットトピック～
- (18) 毒性研究・安全性評価におけるデータサイエンスの活用と今後の展望
- (19) (本部企画・連携) 【日本癌学会合同シンポジウム】 抗がん剤開発と毒性
- (20) (本部企画・連携) 【日本免疫毒性学会合同シンポジウム】 免疫毒性学ってナンだ？ - “働く免疫細胞” に起こる毒性影響，活性化と抑制 -
- (21) (本部企画・連携) 【日本薬理学会合同シンポジウム】 薬物副作用に関わる性差
- (22) (本部企画・連携) 【日本毒性病理学会合同シンポジウム】 日本毒性病理学会からのトピック：病理学的観点から見た化合物による毒性反応の種差
- (23) シグナル伝達相互作用による発生制御機構とその破綻による発生毒性の予測
- (24) (本部企画・学術) 【次世代研究セミナー】 電磁波技術の毒性学への応用 - 見えないものを見る挑戦 -
- (25) 解毒の種差を探る
- (26) フッ素の基礎化学と医薬品開発における現状と展望及び多フッ素化有機化合物の毒性学
- (27) がん原性試験の新しい枠組み～ WoE アプローチの実装
- (28) (本部企画・企画戦略) 【企画戦略シンポジウム】 学際的毒性学を目指して：医療医学系への拡大
- (29) (本部企画・学術) 【キャリア形成支援プログラム】 トキシコロジストのキャリア形成支援プログラム：デジタル時代の人材育成と教育
- (30) (本部企画・生体金属) 生体金属部会シンポジウム ～金属による生殖毒性～

- (31) エピジェネティクス研究の新機軸～モデル動物からヒトまで～
- (32) エクソソーム研究の最前線
- (33) Microphysiological system (MPS) 技術の現状と課題：医薬品・化学品開発と規制への応用に向けて
- (34) 【日本内分泌攪乱化学物質学会共同シンポジウム】子供の脳の毒性学：外来性分子が引き起こす高次脳機能の変調の機構解明
- (35) (本部企画・連携) 【日本中毒学会合同シンポジウム】毒性学・中毒学における新技術と臨床
- (36) 途上国で「今」起こっている環境汚染とその毒性影響
- (公募1) オルガノイドの化学物質・食品応用への安全性評価と将来
- (公募2) 抗ウイルス薬の安全性研究とその展望
- (公募3) 胆汁排泄、胆汁うっ滞評価の新機軸 - 胆汁排泄、胆汁うっ滞のヒト予測向上を求めて
- (公募4) New modality に対する初期毒性評価戦略

7) ワークショップ

- (1) 獣医学分野における毒性学教育
- (2) Target Safety Assessment (TSA) - 医薬品候補品の効率的な創出を目指して
- (3) シン・毒性質問箱～(大)動物種の選択について考える

8) イブニングフォーラム

毒性オミクスフォーラム

9) 第20回市民公開セミナー

テーマ トクホってナンだ？

—いわゆる健康食品との違い—

日時 2023年6月18日(日)

10:30～12:30(開場10:00)

会場 パシフィコ横浜 会議センター 4F 413

司会 北嶋 聡(国立医薬品食品衛生研究所 安全性生物試験研究センター 毒性部 部長)

後援 一般社団法人 横浜市薬剤師会

プログラム

- (1) 人生100年時代を見据えたトクホの活用
～トクホの過去・現在・未来～
受田浩之(高知大学理事・副学長, 内閣府消費者委員会委員長代理)
- (2) いわゆる健康食品の安全性～なぜ、健康被害が起こるのか～
梅垣敬三(静岡県立大学 客員教授)
- (3) 食品衛生法に基づく指定成分制度
今井美津子(厚生労働省 医薬・生活衛生局 食品基準審査課 新開発食品保健対策室 室長)

7. 一般演題

- 1) 一般演題は口演またはポスター発表とします。口演発表は、発表7分、質疑3分の計10分です。発表方法は液晶プロジェクターのみです。ポスター発表は、毎日貼替えでポスター展示を行い、途中に質疑応答時間を設けます。

◆ポスター発表 質疑・応答(コアタイム)

6月19日(月) 17:30～18:15

6月20日(火) 16:55～17:40

6月21日(水) 13:15～14:00

2) 優秀研究発表賞応募演題

応募者はポスター発表に加え、別会場で口頭発表と質疑応答を第1日目(6月19日(月))に行ってください。受賞者の発表は、第2日目(6月20日(火))16時前後に、表彰式は情報交換会(無料招待)において(状況によりましては、第3日目(6月21日(水))午前中に)行う予定です。表彰式等詳細は、年会ホームページにて追ってご案内いたします。受賞者には、賞状と副賞を授与します。

3) 学生ポスター発表賞応募演題

審査はポスター発表内容のみで行います。対象のポスターは第1日目(6月19日(月))に行ってください。受賞者の発表は、第2日目(6月20日(火))午前中に、表彰式は情報交換会(無料招待)において(状況によりましては、第3日目(6月21日(水))午前中に)行う予定です。表彰式等詳細は、年会ホームページにて追ってご案内いたします。受賞者には、賞状と副賞を授与します。

8. 参加登録および参加費

当日参加登録（現金のみ）

6月19日（月）8：30～17：00

6月20日（火）8：30～16：30

6月21日（水）8：00～15：30

※受付の混雑が予想されますので、時間に余裕をもってお越し下さい。

※会期終了後は7月31日まで「VODのみ」の参加登録を年会ホームページよりオンラインにて受け付けます（クレジットカード決済のみ）。

1) 参加費

※学会会員の参加費は「不課税」、関連学会会員、非会員の参加費と懇親会費は「課税（消費税込）」となります。

カテゴリー		当日参加登録
会員		14,000 円
学生会員		4,000 円
関連学会員 ¹⁾		15,000 円
非会員		17,000 円
VODのみ		17,000 円
情報交換会費	（一般）	12,000 円
情報交換会費	（学生）	5,000 円

※ VODとは「ビデオオンデマンド」の略で、インターネットに接続しているスマートフォンやパソコンなどの端末で、随時視聴できるサービスです。現地参加された方及び「VODのみ」に申し込んだ方は、年会終了後～7/31（予定）は追加費用無くVODをご利用いただけます。

※「VODのみ」による参加の場合でも、参加証明書は発行され、認定トキシコロジストの単位に反映されることとなりました。但しVOD公開は発表者の同意が得られた演題のみとなります。VOD対象講演リスト（予定）は年会HPの参加登録ページをご覧ください。

* 1は次の学会会員の方を予定しております。

◇共催学会：

（一社）日本中毒学会

（一社）日本毒性病理学会

日本免疫毒性学会

（公社）日本薬理学会

米国 SOT（Society of Toxicology）

韓国 SOT（Korean Society of Toxicology）

◇協賛学会（2023年6月時点）

（一社）日本安全性試験受託研究機関協議会

日本安全性薬理研究会

（一社）日本環境化学会

日本環境毒性学会

（一社）日本衛生学会

日本環境変異原ゲノム学会

（公社）日本産業衛生学会

（公社）日本実験動物学会

（公社）日本獣医学会

（一社）日本生理学会

日本先天異常学会

（公社）日本動物学会

（一社）日本発生生物学会

日本内分泌攪乱化学物質学会（環境ホルモン学会）

（公社）日本薬学会

（一社）日本薬物動態学会

日本食品化学学会

比較眼科学会

◇後援学会（2023年6月時点）

日本食品微生物学会

（一社）和漢医薬学会

◇協力

日本製薬団体連合会

公益財団法人横浜観光コンベンション・ビューロー

2) お支払い方法

- ・当日参加登録：現金決済のみ
 - ※参加費には、下記が含まれます
- ・年会プログラム要旨集（冊子体，PDF）
 - 冊子体は会場配布となりました。
 - 事前参加登録して頂いた方には郵送登録先に参加章を送付いたします。
 - 同封の送付状もご持参ください。引き換えに要旨集（冊子体）をお渡しいたします。
 - PDF は年会ホームページからのダウンロードを予定しています。

※情報交換会費には、下記が含まれます。

- ・情報交換会参加証
 - 事前参加登録して頂いた方には郵送登録先に情報交換会参加証を送付いたしますので、忘れずにご持参下さい。

9. 情報交換会

次の通り、情報交換会を開催いたしますので、是非ご参加下さい（要・情報交換会参加登録）。

日 時 2023年6月20日（火）18：30～

場 所 ヨコハマグランドインターコンチネンタル
ホテル 3F Ballroom

10. 年会事務局，連絡事務局

年会事務局

〒210-9501 川崎市川崎区殿町 3-25-26

国立医薬品食品衛生研究所

安全性生物試験研究センター 毒性部

相崎健一，小野竜一，桑形麻樹子，高橋祐次

e-mail: secretariat@jsot2023.jp

50回記念担当：

務台 衛（(株)LSIM 安全科学研究所）

広報担当：

安西尚彦（千葉大学）

連絡事務局

〒106-0041 東京都港区麻布台 1-11-9

株式会社コンベックス内

e-mail : jsot2023@convex.co.jp

11. その他

50回の記念の意を込め、J-STAGE 非掲載の第1回（1975年・昭和50年）～第31回（2004年・平成16年）までの年会要旨集のPDF化をおこない、年会ホームページに掲げております。また、事前参加登録者のみなさまにお届けする封筒色は、花緑青（アセト亜ヒ酸銅）色を意識した色を選んでおります。

第49回日本毒性学会学術年会要旨集の販売について

第49回日本毒性学会学術年会の要旨集（CD-R）を1枚3,500円（税・送料込）で販売します。ご希望の方は郵便局に備付けの郵便振替用紙に必要事項をご記入の上、下記口座までお振り込み下さい。ご納入確認後、要旨集を発送致します。

なお、学術年会（第32回以降）の要旨はオンライン（J-STAGE）でも閲覧が可能です。

振込先：口座番号	00150-9-426831
加入者名	一般社団法人日本毒性学会
要旨集価格	3,500円（1枚）

通信欄記入事項：①住所 ②氏名（団体の場合は機関名・部署等） ③電話番号
④第49回学術年会要旨集希望の旨

※通信欄のご記入住所へ送付いたします。詳細なご記入をお願いいたします。

問い合わせ先：一般社団法人 日本毒性学会
〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1
パレスサイドビル
（株）毎日学術フォーラム
TEL：03-6267-4550 FAX：03-6267-4555
E-mail：jsothq@jsot.jp

その他のお知らせ

第30回日本免疫毒性学会学術年会

会期 2023年9月11日(月)～9月13日(水)

開催方式 対面方式

会場 Shimadzu Tokyo Innovation Plaza
(川崎市川崎区殿町 3-25-40)
川崎生命科学・環境研究センター (LiSE)
(川崎市川崎区殿町 3-25-13)

年会長 中村亮介 (国立医薬品食品衛生研究所)

テーマ 社会に求められる新たな免疫毒性研究

主催機関 日本免疫毒性学会

共催 日本産業衛生学会アレルギー・免疫毒性研究会

協賛 日本衛生学会, 日本食品衛生学会, 日本毒性学会,
日本毒性病理学会, 日本薬学会 (五十音順)

後援 日本アレルギー学会

主なプログラム

- 第30回記念講演「免疫毒性学の継往開来」
- 特別講演「日本におけるワクチン開発：SCARDAの取り組み」
- シンポジウム「新規モダリティ医薬品・ワクチン開発における免疫毒性」
- 試験法ワークショップ「ヒト免疫系を模した評価モデルの現状と将来展望」
- 公開シンポジウム「環境中化学物質の免疫毒性リスク評価」
(無料・要登録)
- 他 一般/若手演題(口頭,ポスター),ランチョンセミナー,企業展示等

懇親会 対面方式で実施予定

一般演題募集 2023年6月1日(木)～7月4日(火)

事前参加登録 2023年6月1日(木)～7月31日(月)

協賛学会会員の参加登録費

- 事前登録 7,000円 (学生会員 3,000円)
- 当日受付 9,000円 (学生会員 5,000円)

年会ホームページ <https://www.jsit2023.jp>

学会事務局

- 国立医薬品食品衛生研究所 医薬安全科学部
- 担当: 田中
- 〒210-9501 神奈川県川崎市川崎区殿町 3-25-26
- Tel: 044-270-6626 Fax: 044-270-6627
- E-mail: jsit2023@nihs.go.jp
- URL: <https://www.jsit2023.jp>

フォーラム 2023 衛生薬学： 環境トキシコロジー

詳細は本会ホームページ <https://www.senkyo.co.jp/eiseiforum2023/>を参照下さい。

テーマ 広島から世界の人々の平和と健康を願って

会期 2023年9月12日(火), 13日(水)

会場 広島大学霞キャンパス凌雲棟
〒734-8553 広島県広島市南区霞 1丁目 2-3
JR 広島駅より路線バス「まちのわろーぷ」右回り
にて大学病院前下車徒歩約3分

実行委員長 古武 弥一郎 (広島大学大学院医系科学研究科)

プログラム

- 特別講演 田原栄俊 (広島大)
「核酸医薬による悪性胸膜中皮腫治療薬への挑戦」
- 教育講演 太田 茂 (和歌山県医大)
「薬学教育の現状と将来」
- 招待講演 (韓国より)
日韓シンポジウム
- フォーラム I 「死因究明において薬学は何を期待されているのか ー現状と展望ー」
- フォーラム II 「若手が切り拓くオルガネラバイオロジー&トキシコロジーの新視点」
- フォーラム III 「脂溶性ビタミン研究の最前線」

一般演題募集

- 演題登録 ～6月9日(金)
- 要旨ファイル登録 ～6月16日(金)

懇親会

- 日時: 2023年9月12日(火)
- 会場: ANA クラウンプラザホテル広島

お問合せ

- フォーラム 2023 事務局
- 広島大学大学院医系科学研究科 生体機能分子動態学研究室内 (大黒 亜美・宮良 政嗣)
- 〒734-8553 広島県広島市南区霞 1-2-3
- TEL: 082-257-5327 または 082-257-5326
- E-mail: forum2023@hiroshima-u.ac.jp

一般社団法人日本毒性学会の定款および規程類について

日本毒性学会の定款および規程類については、最新版が学会ホームページ (http://www.jsot.jp/about/rule_list.html) に掲載されています。

2022年9月2日付で「研究倫理要綱」と「研究倫理問題に関する規程」が新たに制定されました。学会ホームページでご確認をお願いします。

一般社団法人日本毒性学会 定款

一般社団法人日本毒性学会 研究倫理要綱

一般社団法人日本毒性学会 研究倫理問題に関する規程

一般社団法人日本毒性学会 動物実験に関する指針

一般社団法人日本毒性学会 入会規程

一般社団法人日本毒性学会 賛助会員に関する規程

一般社団法人日本毒性学会 名誉会員・功労会員推薦規程

一般社団法人日本毒性学会 評議員選出規程

一般社団法人日本毒性学会 理事・監事選出規程

一般社団法人日本毒性学会 理事および監事候補の選出に関する細則

一般社団法人日本毒性学会 常置委員会共通規程

一般社団法人日本毒性学会 部会に関する規程

J. Toxicol. Sci. 投稿規程

Fundam. Toxicol. Sci. 投稿規程

一般社団法人日本毒性学会 学会賞選考規程

一般社団法人日本毒性学会 特別賞選考規程

一般社団法人日本毒性学会 佐藤哲男賞（国際貢献賞）選考規程

一般社団法人日本毒性学会 学会貢献賞選考規程

一般社団法人日本毒性学会 奨励賞選考規程

一般社団法人日本毒性学会 技術賞選考規程

一般社団法人日本毒性学会 田邊賞選考規程

一般社団法人日本毒性学会 ファイザー賞選考規程

一般社団法人日本毒性学会 日化協 LRI 賞選考規程

一般社団法人日本毒性学会 認定トキシコロジストの認定制度規程

一般社団法人日本毒性学会 認定トキシコロジストの資格更新に関する細則

一般社団法人日本毒性学会 名誉トキシコロジスト表彰に関する細則

一般社団法人日本毒性学会 米国毒性学会教育コースへの学会員派遣に関する規程

一般社団法人日本毒性学会 個人情報の適正な管理・利用等に関する基本方針

高い再現性と信頼性で短期発がん性試験を実現したモデルマウス

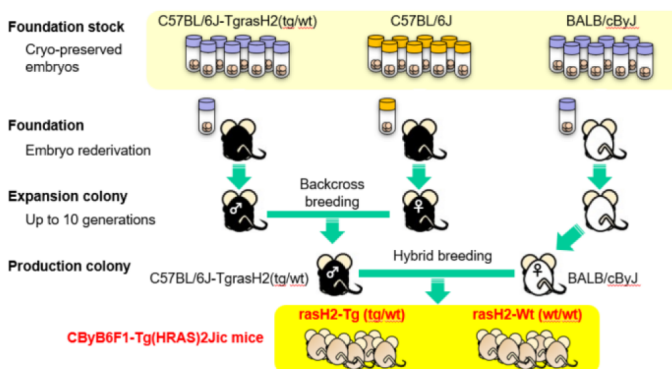
rasH2マウス



rasH2マウスは（公財）実験動物中央研究所（実中研）、東海大学医学部、国立がんセンター研究所（当時）との共同研究により開発されました（Saitoh A. et al., Oncogene. 1990）。その後1993年に実中研で発がん性評価試験の実用化を開始、1997年から2001年の5年間における日米欧の産官学50施設の国際共同研究 (ILSI/HESI)によってrasH2マウスの高いがん性評価の再現性、安定性が証明されました。当社では、2001年より本格的生産・供給をしております。2022年現在、遺伝子改変マウスによる短期発がん性試験のスタンダードモデルとして認知され、世界各国で利用頂いております。

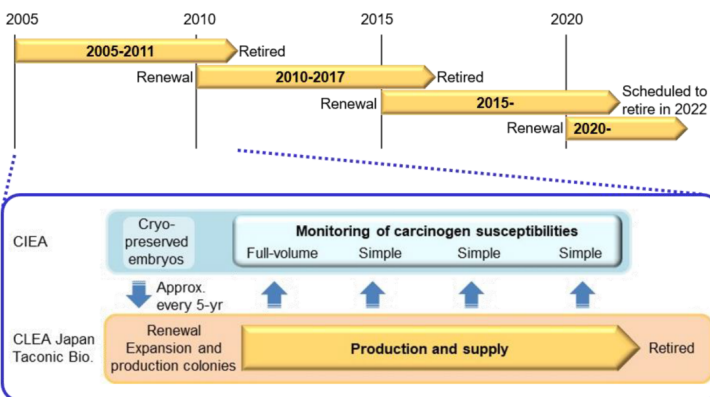
rasH2マウス: 生産システム

◆ rasH2マウスの“発がん感受性”の永続的・安定的な維持と安定供給のためにデザインされた生産システム



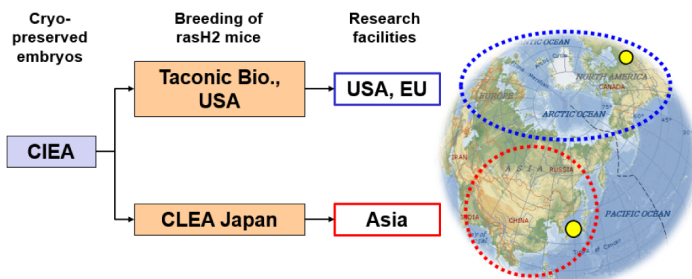
rasH2マウス: 品質管理システム

◆ rasH2マウスの“発がん感受性”を確認・保証するためにデザインされた品質管理システム

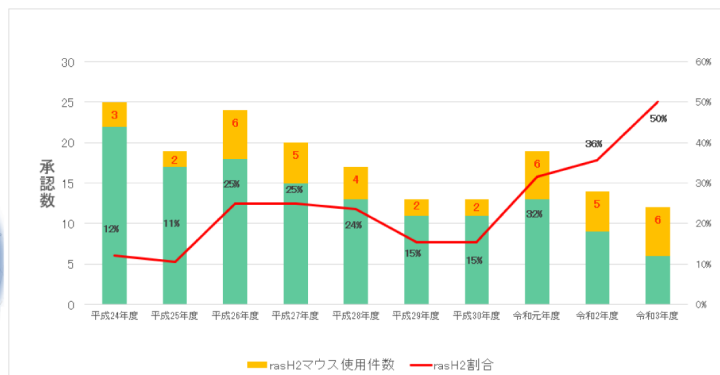


rasH2マウス: グローバルな安定供給体制

◆ 日本クレア、Taconic Biosciencesにて、定められ生産システムに基づきrasH2マウスを生産し、世界各国に供給しています



発がん性試験が実施された医薬品の承認状況



図：日本国内の過去10年間の発がん性試験推移 (PMDAのHPより独自調査)

受注センター
 東京 A D 部 〒153-8533 東京都目黒区東山 1 - 2 - 7
 大阪 A D 部 〒153-8533 東京都目黒区東山 1 - 2 - 7
 〒564-0053 大阪府吹田市江の木町 6 - 5
 仙台出張所 〒983-0014 宮城県仙台市宮城野区高砂1-30-24
 札幌出張所 〒063-0849 北海道札幌市西区八軒9条西10-4-28
 名古屋出張所 〒465-0093 愛知県名古屋市名東区一社3-79

TEL 03-5704-7123 FAX 03-3792-2368
 TEL 03-5704-7050 FAX 03-3792-2032
 TEL 06-4861-7101 FAX 06-4861-7108
 TEL 022-352-4417 FAX 022-352-4419
 TEL 011-631-2725 FAX 011-644-9209
 TEL 052-715-7580 FAX 052-715-7590



日本クレア株式会社

<http://www.CLEA-Japan.com>

Shin Nippon Biomedical Laboratories, Ltd.

創薬と医療技術の向上を支援し、
人類を苦痛から解放することを
絶対的な使命とします



(株)新日本科学は60年以上にわたる
豊富な経験と実績に裏付けされた確かな技術力により
質の高いサービスとニーズに合わせたソリューションを提供します



株式会社 新日本科学

<https://www.snbl.co.jp> mail: info@snbl.com



SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS



新薬の研究開発に 寄り添う技術力

実験には、様々なノウハウと
手技が求められます。

私たちは、「研究する心・想像する心」で
日々研鑽し、新しい技術の開発に
取り組んでいます。

明日の医療の発展を願って…

医薬品・医療機器・再生医療等製品の開発支援
各種GLP適合・AAALAC International 完全認証施設

・安全性試験・薬効試験・各種検査
・臨床試験・翻訳サービス・SENDサービス



株式会社新日本科学グループ
Ina Research Inc.
<https://www.ina-research.co.jp>

ケー・エー・シーでは医薬品の研究・開発にお使いいただける 細胞・ヒト由来試料を取扱っております

研究用試薬

HepaRG®・初代肝細胞



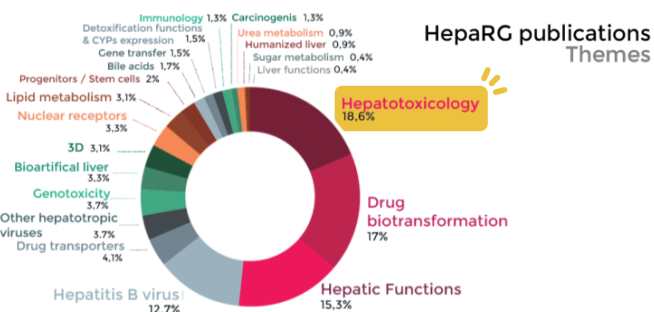
HepaRG®は、BIOPREDIC International社がライセンスを保有するヒト肝細胞セルラインです。肝細胞様形態を呈し、各種肝機能を保持・発現しており、ヒト初代肝細胞の代替ツールとして毒性試験および薬物動態などに広く利用されています。

➤ HepaRG®は様々な毒性評価に使用可能！

- ✓ ミトコンドリア毒性の評価
- ✓ 反応性代謝物による肝毒性評価
- ✓ 炭水化物および脂質代謝評価
- ✓ 胆汁うっ滞の評価

また、弊社ではBIOPREDIC International社をはじめとして、様々なメーカーで調製された品質の良い初代肝細胞（ヒト、ラット、イヌ、サル等）もご用意しております。

➤ HepaRG®を使用した論文が多数発表されている中、毒性試験で多く使用されています！



ECACC標準株細胞・核酸製品

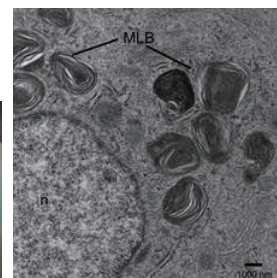
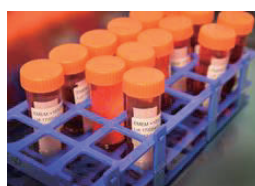


欧州最大の公的セルバンクであるECACCのセルリソース（標準株細胞・核酸製品）を、KAC独自のサービスとともに、**面倒な手続きなし***でお届けしています。

*：一部の細胞は、提供にあたり確認審査が必要になります。

➤ メリット！

- ✓ スタンダードな株細胞は国内に常時在庫
- ✓ プラス5,000円で、培養状態での提供可能
- ✓ 幾つかの起眠が難しい細胞はKACが代行
- ✓ KACによる迅速な技術サポート体制



肝毒性・腎毒性評価の受託試験



薬物トランスポーター研究のパイオニアであるSOLVO Biotechnology社にて、肝毒性・腎毒性評価試験などのサービスの提供も行っております。

➤ 試験例

- ✓ 代謝が遅い化合物の肝毒性評価（ヒト、サル、ラット、イヌ）
（HepatoPac®：初代肝細胞と間質細胞のマイクロパターン共培養にて評価）
- ✓ 早期腎障害バイオマーカーパネルを用いた腎毒性の可能性の評価 等



<https://www.saibou.jp/>



▶ これらの製品情報を細胞.jpでご調べ頂けます



株式会社 ケーエーシー

<https://www.kacnet.co.jp/>

お問い合わせ先

試薬事業部

TEL:06-6435-9747 FAX:06-6435-9748

e-mail: shiyaku-info@kacnet.co.jp

SLCの実験動物



マウス

●アウトブリード

Sic : ddY

☆IVCS

Sic : ICR

●インブリード

DBA/1.JmsSlc(コラーゲン薬物誘導関節炎)

BALB/cCrSlc

C57BL/6NcrSlc・C57BL/6JmsSlc

C3H/HeSlc

C3H/HeNSlc

C3H/HeYokSlc

DBA/2CrSlc

NZW/NSlc

A./JmsSlc

AKR/NSlc

NC/NgaSlc(薬物・アレルギー誘導アトピー性皮膚炎)

CBA/NSlc

129×1/SvJmsSlc

●B10コンジュニック

C57BL/10SnSlc

B10.A/SgSnSlc・B10.BR/SgSnSlc

B10.D2/nSgSnSlc・B10.S/SgSlc

●ハイブリッド

B6D2F1/Slc(Slc:BDF1)

CB6F1/Slc(Slc:CBF1)

CD2F1/Slc(Slc:CDF1)

B6C3F1/Slc(Slc:B6C3F1)

※上記以外の系統については御相談ください。

●ヌードマウス(ミュータント系)

BALB/cSlc-*nu*(*Foxn1^{nu}*)

KSN/Slc(*Foxn1^{nu}*)

●疾患モデル

BXSb/MpJmsSlc-*Yaa*(自己免疫疾患)

C3H/HeJmsSlc-*lpr*(自己免疫疾患-*Fas^{lpr}*)

C57BL/6JmsSlc-*lpr*(自己免疫疾患-*Fas^{lpr}*)

MRL/MpJmsSlc-*lpr*(自己免疫疾患-*Fas^{lpr}*)

NZB/NSlc(自己免疫疾患)

NZBWF1/Slc(自己免疫疾患)

WB6F1/Ki^h/Ki^h/Slc(肥満細胞欠損貧血-*Ki^h/Ki^h*)

NC/Nga(皮膚炎)

☆ Hos : HR-1(ヘアレスマウス)

☆ Hos : HRM-2(メラニン保有ヘアレスマウス)

★ SAMR1/TaSlc(SAMP系対照動物)

★ SAMP1/SkuSlc(老化アミロイド症)

★ SAMP6/TaSlc(老年性骨粗鬆症)

★ SAMP8/TaSlc(学習記憶障害)

★ SAMP10/TaldrSlc(脳萎縮・うつ様行動)

★ SAMP10-ΔSgt12

(SGLT2変異による腎性糖尿・脳萎縮を伴う学習記憶障害・うつ様行動)

☆ AKITA/Slc(糖尿病)

☆ TSOD(2型糖尿病)

C57BL/6HamSlc-*ob/ob*(肥満・2型糖尿病-*Lepr^{ob}*)

☆ C57BLKS/Jlar-+*Lepr^{ob}*/+*Lepr^{ob}*(肥満・2型糖尿病-*Lepr^{ob}*)

★ NSY/Hos(2型糖尿病)

★ C57BL/6N-Daruma(肥満)

★ HIGA/NscSlc(IgA腎症)

★ B6.KOR/StmSlc-*Apoe^{sh}*(アポE欠損高脂血症-*Apoe^{sh}*)

★ C.KOR/StmSlc-*Apoe^{sh}*(アポE欠損高脂血症-*Apoe^{sh}*)

★ C.KOR/StmSlc-*Traf3ip2^{em}*(アトピー性皮膚炎マウス-*Traf3ip2^{em}*)

ラット

●アウトブリード

Sic : SD

Sic : Wistar

Sic : Wistar/ST

☆ lar : Wistar(Wistar-Imamichi)

☆ lar : Long-Evans

●インブリード

F344/NSlc

BN/SsNSlc

DA/Slc(薬物誘導性関節炎)

LEW/SsNSlc(薬物誘導性関節炎)

●ヌードラット(ミュータント)

Sic : Long-Evans-*rrnu/rrnu*

●疾患モデル

★ SHR/lzm(高血圧)

★ SHRSP/lzm(脳卒中)

★ WKY/lzm(SHR/lzmのコントロール)

★ SHRSP5/Dmcr(NASHモデル【HFC飼料給餌】)

★ SHRSP/Ezo(AD/HD)

DIS/EisSlc(食塩感受性高血圧症)

DIP/EisSlc(食塩抵抗性)

Sic : *Zucker-fafa*(肥満-*Lepr^{ob}*)

☆ Hos : ZFDM-*Lepr^{ob}*(糖尿・肥満)

HWY/Slc(ヘアレスラット)

☆ Hos : OLETF(2型糖尿病)

☆ Hos : LETO(OLETFのコントロール)

モルモット

●アウトブリード

Sic : Hartley

ウサギ

●アウトブリード

Sic : JW/CSK

Sic : NZW

ハムスター

●アウトブリード

Sic : Syrian

J2N-k(心筋症モデル)

J2N-n(J2N-kのコントロール)

スナネズミ

●インブリード

MON/Jms/GbsSlc

無菌動物

F344/NSlc(GF)

☆ Tsl : C57BL/6Ncr

ENVIGO(旧ハーランOEM生物動物)

●アウトブリードラット

RocHan® : WIST

●インブリードマウス

CBA/CaOlaHsd

●免疫不全モデルマウス

C.B-17/1crHsd-Prkdc^{scid}

遺伝子改変動物

■疾患モデル

★ APP^{SwTg}[C57BL/6-Tg(APP^{Sw})](オリゴマ病理-老人斑形成なし)

★ APP^{WT-Tg}[C57BL/6-Tg(APP^{WT})](APP^{Sw}の対照動物)

★ Tau609 Tg[C57BL/6-Tg(tau609)](タウ病理)

★ Tau784 Tg[C57BL/6-Tg(tau784)](タウ病理)

★ Tau264 Tg[C57BL/6-Tg(tau264)](Tau609, Tau784の対照動物)

一ノクインマウス

★ OSK-K1[C57BL/6-Tg(OSK-K1)](マウスAβを産生)

(特許第6323876号)

EGFPモデル

●マウス

C57BL/6-Tg(CAG-EGFP)(グリーンマウス)

●ヌードマウス

C57BL/6-BALB/c-*nu/nu*-EGFP(EGFP全身発現ヌードマウス)

●ラット

SD-Tg(CAG-EGFP)(グリーンラット)

■gpt deltaモデル

●マウス

C57BL/6JmsSlc-Tg(*gpt delta*)

●ラット

F344/NSlc-Tg(*gpt delta*)

その他(クリーン動物)

●医薬用ベビーブタ SHIZUOKA EXP1G

☆ 静岡県畜産技術研究所中小家畜センター

その他(conventional動物)

●ビーグル犬

☆ 国内繁殖生産(一財)動物繁殖研究所

●マイクロミニピッグ

☆ 国内繁殖生産(富士マイクラ株式会社)

●ミニブタ

☆ 国内繁殖生産(日生研株式会社-NPO法人 医用ミニブタ研究所)

●フェレット

☆ 自家繁殖生産(中伊豆支所)

●コモンマーモセット

☆ 自家繁殖生産(中伊豆支所)

受注生産動物

マウス

●疾患モデル

★ (NZW×BXSb)F1/Slc(紫斑症)

ラット

●疾患モデル

GK/Slc(2型糖尿病)

★印は受注生産動物、☆印は仕入販売動物です。



日本エス エル シー株式会社

〒431-1103 静岡県浜松市西区湖東町3371-8

TEL(053)486-3178(代) FAX(053)486-3156

http://www.jslc.co.jp/

営業専用
TEL

関東エリア (053)486-3155(代)

関西エリア (053)486-3157(代)

九州エリア (0942)41-1656(代)

一般社団法人 日本毒性学会

[名誉会員 (就任年度順)]

今道 友則	堀口 俊一	福田 英臣	池田 正之
加藤 隆一	井村 伸正	佐藤 哲男	渡辺 民朗
榎本 眞	小野寺 威	遠藤 仁	鎌滝 哲也
赤堀 文昭	土井 邦雄	長尾 拓	福高 昭治
津田 修治	吉田 武美	堀井 郁夫	大野 泰雄
上野 光一	山添 康	永沼 章	

[功労会員 (就任年度順)]

高仲 正	前川 昭彦	佐藤 温重	安田 峯生
菊池 康基	大沢 基保	今井 清	降矢 強
玄番 宗一	唐木 英明	仮家 公夫	暮部 勝
野村 護	牧 栄二	三森 国敏	佐神 文郎
遠山 千春	小野寺博志	杉本 哲朗	西田 信之
中村 和市	姫野誠一郎	眞鍋 淳	安仁屋洋子
横井 毅	久田 茂		

[賛助会員 (五十音順)]

●ダイヤモンド

(株)新日本科学

●プラチナ

第一三共(株)

Charles River

●ゴールド

旭化成ファーマ(株)

あすか製薬(株)

アステラス製薬(株)

(株)安評センター

EA ファーマ(株)

(株)イナリサーチ

エーザイ(株)

(株)LSIM 安全科学研究所

大塚製薬(株)

小野薬品工業(株)

花王(株)

一般財団法人化学物質評価研究機構

科研製薬(株)

杏林製薬(株)

協和キリン(株)

興和(株)

三栄源エフ・エフ・アイ(株)

サントリーホールディングス(株)

(株)三和化学研究所

塩野義製薬(株)

(株)資生堂

シミックファーマサイエンス(株)

住友ファーマ(株)

住友化学(株)

(一財)生物科学安全研究所

ゼリア新薬工業(株)

千寿製薬(株)

大正製薬(株)

大鵬薬品工業(株)

武田薬品工業(株)

田辺三菱製薬(株)

中外製薬(株)

帝人ファーマ(株)

(株)DIMS 医学研究所

トーアエイヨー(株)

東レ(株)

(一社)日本化学工業協会

日本香料工業会

日本新薬(株)

ファイザー(株)

富士フイルム(株)

扶桑薬品工業(株)

(株)ボゾリサーチセンター

Meiji Seika ファルマ(株)

持田製薬(株)

(株)薬物安全性試験センター

ライオン(株)

東レ(株)

[役員] (2022 ~ 2023 年度)

理事長	務台 衛		
理事	朝倉 省二	安西 尚彦	上原 孝
	小椋 康光	鍛冶 利幸	菅野 純
	古武弥一郎	児玉 晃孝	佐藤 雅彦
	渋谷 淳	高橋 祐次	奈良岡 準
	広瀬 明彦	黄 基旭	福島 民雄
	宮内 慎	宮脇 出	森 和彦
	山本 千夏		
監事	天野 幸紀	三浦 伸彦	

[委員会] (2022 ~ 2023 年度)

●印: 常置委員会 ◆印: 小委員会

● 理事長 務台 衛

● 総務委員会	委員長	小椋 康光
◆ 連携小委員会	委員長	上原 孝
◆ 評議員選考小委員会	委員長	佐藤 雅彦
◆ 名誉会員および功労会員選考委員会	委員長	小椋 康光
◆ 指針値検討小委員会	委員長	広瀬 明彦
◆ 企画戦略小委員会	委員長	宮脇 出

● 財務委員会 委員長 森 和彦

● 編集委員会	委員長	鍛冶 利幸
	副委員長	古武弥一郎
	副委員長	藤原 泰之
◆ JTS 編集委員会	委員長	鍛冶 利幸
	副委員長	古武弥一郎
	副委員長	藤原 泰之

◆ FTS 編集委員会	委員長	永沼 章
◆ Executive Editor 小委員会	委員長	永沼 章
◆ 田邊賞選考小委員会	委員長	宮脇 出
◆ 毒性学ニュース機能強化 WG	WG 長	古武弥一郎

● 教育委員会 委員長 高橋 祐次
(小委員長・委員は10月末で交代)

◆ 生涯教育小委員会	委員長	黄 基旭
◆ 基礎講習会小委員会	委員長	橋本 清弘
◆ 認定試験小委員会	委員長	福島 民雄
◆ トキシコロジー 4ed. 編集 WG	WG 長	鈴木 睦

● 学術広報委員会	委員長	児玉 晃孝
◆ 学会賞等選考小委員会	委員長	上野 光一
◆ 佐藤哲男賞・学会貢献選考小委員会	委員長	姫野誠一郎
◆ 特別賞等選考小委員会	委員長	上野 光一
◆ 技術賞選考小委員会	委員長	三島 雅之
◆ 日化協 LRI 賞選考小委員会	委員長	渋谷 淳
◆ 学術小委員会	委員長	吉成 浩一
◆ 広報小委員会・HP 担当	委員長	児玉 晃孝
	副委員長	宮内 慎
◆ トピックス小委員会	委員長	中西 剛

その他関連の委員会

○ IUTOX 担当 Executive Committee, Director 広瀬 明彦
○ ASIATOX 担当 ASIATOX Councilor 田口 恵子
○ SOT 担当 熊谷 嘉人
○ 日本学術会議担当 委員 石塚真由美

部会

○ 生体金属部会 部会長 佐藤 雅彦
○ 医薬品毒性機序部会 部会長 北嶋 聡
○ 付加体科学部会 部会長 上原 孝

[学術年会長]

第50回 (2023年) 北嶋 聡

第51回 (2024年) 上原 孝

第52回 (2025年) 黄 基旭

2023年6月1日 印刷

2023年6月1日 発行

発行人 務台 衛

編集人 鍛冶利幸

発行所 一般社団法人日本毒性学会

学会事務局 〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1

パレスサイドビル

(株)毎日学術フォーラム

一般社団法人日本毒性学会事務局

TEL (03) 6267-4550 FAX (03) 6267-4555

E-mail : jsothq@jsot.jp

振替 00150-9-426831

<http://www.jsot.jp>

印刷所 株式会社 センキョウ

〒983-0035 仙台市宮城野区日の出町二丁目4-2

TEL (022) 236-7161